

やっぱりおかしいぞ!? 美術館開館記念フォーラム 沖縄文化の軌跡 part 1 ~ part 3 (沖縄県教育委員会主催 + 沖縄タイムス社共催) に参加して

安座間安司 (美術批評家 / 「美術館問題について大いに語る会」実行委員会代表)

すでに本ブログの昨年 12 月 24 日（日）でも報告されているが、2006 年 12 月 22 日（金）の県議会で「沖縄県立博物館・美術館の設置に関する条例（案）」が与党の賛成多数で可決されてしまった。これまでも新聞やブログを通して、今年（2007 年）11 月開館予定の『沖縄県立博物館 / 美術館（仮称）』の運営方針や「指定管理者制度導入」をめぐる行政の強引なやり方に対し、さまざまな角度から批判を行い、改善や再考の要求を行ってきた。しかし、この間の経過を振り返ってみると、行政のみならず、本来なら批判的スタンスをとってもおかしくないマスコミまでもが、とりわけ沖縄タイムスにおいて、ときに消極的とはいえ、行政寄りともとれる「おかしな」報道姿勢をみせており、まったく裏切られた思いを強くしてきた。

もちろん、その度に「抗議」めいたこともしてきたし、このブログの 11 月 30 日付けの「[なんだか、おかしいぞ？ 沖縄県教育委員会主催・沖縄タイムス社共催による『美術館開館記念フォーラム 沖縄文化の軌跡 part 1 ~文学・思想から考える~』に参加して](#)」（以下「美術館開館記念フォーラム part 1」）も、そうしたタイムス報道の「おかしさ」に対する批判のつもりであった。

ところが、2006 年 11 月 25 日（土）朝刊に掲載されたその「フォーラム part 1」の「特集」内容も、懸念していたように同社に都合のいい展開になっているようで失望した。その後も、2006 年 12 月 15 日（水）には那覇市の『パレット市民劇場』で、同「フォーラム part 2 ~表象文化ー<アイドル>・<移民>・<海洋博・リゾート>~」が開催され、タイムス 12 月 28 日（木）にその「特集」が掲載された。また今年 2007 年 2 月 6 日（火）には那覇市『教育福祉会館』で、同じく「フォーラム part 3 ~沖縄の造形~」が開かれ、同紙 2 月 18 日（日）にその「特集」が掲載されている。それらも、結論から先に言えば、要領を得ない進行とフロアからの質問に対する対応含めて、予想以上に「おそまつ」で後味の悪いものであった。しかし、同紙の各「特集」を読んだだけでは、そうした"空気"は伝わってこないし、内容もかなりおおざっぱなまとめ方で、意図的に「ぼかしている」のではないかと思われるところもある。これら「フォーラム」や、その「報道」自体、今後の文化行政やマスコミの文化事業のあり方について多くの問題を残すものだと思っているが、あらためてそれらを中心にその後の「美術館問題」に関する動きについて考えてみたい。

昨年 12 月の県議会で"問題だらけの県立の博物館・美術館"に関する「条例案」が与党多数で可決された後、2007 年 3 月 10 日（土）現在まで、特に「目立った大きな動き」は起こっていないが、その間、教育委員会主催、沖縄タイムス社共催による「県立美術館開館記念フォーラム part 2 ~表象文化~<アイドル>（當山忠）<移民>（新垣誠）<海洋博・リゾート>（仲里効）」が昨年 12 月 15 日（金）に那覇市の『パレット市民劇場』で行われた。県議会への対応他、個人的な事情で中々まとめることができないままだったが、その「part 2」も繰り返しになるが、結論から言えば「おそまつ」で後味の悪いものだった。

個々のパネリストの発言はそれなりに興味深いものであったが、例えば、沖縄キリスト教学院大学助教授新垣誠氏の<移民>についての話や、『EDGE』編集長仲里効氏の<海洋博・リゾート>の分析などはもう少ししていねいに聞きたいと思ったほどだが、司会 = 聞き手の真久田正氏の進行が相変わらずマズイので、たださえ接点を見出しにくい 3 つのテーマに拍車をかけるように錯綜とした装いを与えてしまった。さらに言えば、それらのテーマ「表象文化」が「沖縄の美術」とどう関わってくるのかとなると、時間的制約もあったとはいえ、かろうじてパネリスト個々の「感想」めいたレベルでしか提示できなかった。

前回 (part 1 の時に) 会場でこちらの「質問」をさえぎられそうになったはいえ、真久田氏に特に"恨み"を持っているわけでもないが、先日 2 月 6 日 (火) には、さらに「part 3 ~ 沖縄の造形 ~」も開催され、相変わらず要領を得ない司会 = 聞き手ぶりに正直苛立ちを新たにした。他のパネリストの「人選」をみても、どこに「的をしぼって」いるのかよく分からないという印象だった。当然、パネリスト同士の接点も見出せず、結果的にこれもまた、後味の悪い展開になってしまった。「進歩」や「反省」が見られないというのが正直な感想であるが、その「part 3 ~ 沖縄の造形 ~」では、とうとう他の美術関係者からも司会 = 聞き手やパネリストの「人選」の根拠を問う意見もあったので、参加者の多くがそういう不満を感じていたのだろう。この「フォーラム」自体が「県立美術館」の「開館記念展」のイベントということだが、「美術館」のビジョン同様、ますます展示会のイメージがつかめないという印象だ。

なぜ、これほど"意地"になって、タイムス (と教育委員会) が特に司会 = 聞き手の「人選」に執着するのか素朴に疑問に思っていた。しかし、同紙 2 月 14 日 (水) 夕刊に、[真久田氏が、琉球王朝時代 = 「大航海時代」の"海の象徴"であるらしい「進貢船」を復元する会 \(「進貢船を造る会 \(仮称\)」\)](#) を、[琉球大学の歴史学教授の高良倉吉氏 \(「博物館」の監修委員の一人であり、2006 年 5 月 ~ 6 月に行政によって設置・開催された"有識者"による「県立博物館新館・美術館のあり方について語る会 \(尚弘子座長\)」の委員の一人でもある\)](#) を[発起人の一人とした、50 人程度の「仲間」たちと進めているらしい記事](#) をみて、驚きとともにそれなりの理由があったことを知った。なんのことはない、「進貢船」を「県立博物館・美術館」の展示 (= 観光イベント化) の目玉にする計画で進めているらしいので、いつのまにか「博物館」運営に大きな影響を与えている歴史学者と、美術館に関する「フォーラム」を仕切っている (?) 司会 = 聞き手とが、「進貢船」というキーワードで仲良く手を結んでいるような構図になっている。

つまり、これまで館 = 建物の一元化を理由に、実質的な博物館への美術館の「統合」を進めてきた行政の思惑 (建て前上は、それぞれ「独立した機能の館」ということになっている) が、マスコミを巻き込んで、よりあからさまな形で"政治的"に打ち出されたかっこうになっているのである (そう見えてしまう)。司会 = 聞き手の真久田氏の強引な起用の根拠は、そうしたレベルの問題にかかわっているとしか思えないが、だとしたらあまりにも見え透いた、それこそ「おそまつ」な展開というしかない (もしかしたら、「文学や思想にも造詣が深い」という理由で起用したのかもしれないが、個人的にはそれは"疑わしい"という感じだ)。

正直呆れているが、そもそも今回の「県立博物館・美術館」の「指定管理者」をめぐる問題が、これも実質的な「民間企業 = 市場原理の導入」という形で積極的に打ち出されたのは、大城常夫元琉球大学教授を会長とした「沖縄県行政改革懇話会 (会長)」から「沖縄県知事 (稲嶺恵一) への提言」以降である (平成 18 年 1 月 16 日付教育庁資料より)。そして沖縄県内では有名な話だが、懇話会会長の大城常夫氏は、2000 年に先の博物館の監修委員の一人である高良倉吉氏と故真栄城守定琉球大学教授の 3 名で、「アジア太平洋地域で沖縄が果たすべき可能性」として「日米同盟における米軍基地との共存」を謳った『沖縄イニシアティブ』(ひるぎ社、2000 年 9 月) なるものを提言し、タイムスと琉球新報 2 紙による「特集」で、多くの論客らと議論を展開した (叩かれた) 当人たちである。

当時は同新聞 2 社とも、『沖縄イニシアティブ』とその当事者である件の 3 人に対しては批判的スタンスをとっていたはずだが、現段階では少なくともタイムスは、「昨日の敵は今日の友」(?) とばかりに、「文化」に関しては"利益が一致した"のか、奇妙な形で、その『沖縄イニシアティブ』組と手をたずさえているように見える。私はこうした事態に、「安全保障とか財政や選挙制度のような"政治課題"にはある程度騒ぐマスコミも、

"文教政策"になると、関心をもたないどころか、場合によっては、政府(=行政側)のお先棒かつぎさえする」と揶揄している金沢大学法学部教授の仲正昌樹氏の「発言」を思い起こしている(註1)。このところ、沖縄でもマスコミ批判が散見されるようになってきたが(註2)、まさにそんな"現実"を目の当たりにしているような印象だ(もしかしたら、私が知らなかっただけで業界ではごく当たり前のことなのかもしれない)。

この「文化」に関する行政側とマスコミ=タイムスの"利益の一致"については、すでに、これも思わぬところから、「沖縄県立博物館・美術館」の管理運営で問題になっている「指定管理者」に沖縄タイムス社が参入したがつているという具体的な"うわさ"が「全国的(?)」にも暴露されたので(註3)(もちろん他にもいくつかの民間企業参入の"うわさ"は出ているが)、タイムス社が前面に出て牽引しているような事情もうなずけるかっこうになってしまった。ここでは、その"うわさの中身の是非"についてはこれ以上言及しないが(できないが)、そうした"うわさ"を無視するのも"不自然"な状況になってきたので、そのことを念頭に置きながら「フォーラム」の part 1 から part 3 について、あらためて振り返ってみたいと思う。

(註1)『集中講義!日本の現代思想~ポストモダンとは何だったのか~』(NHK ブックス、2006年11月)あとがきより。

(註2)『けし風』第53号(特集:どうする、沖縄の<言論>)(新沖縄フォーラム刊行会議出版2006年12月)。シンポジウム「未来は誰のもの?~戦争する国づくり・格差社会の中で~」(主催:沖縄平和運動センター、高教祖、全港湾、マスコミ労協 2007年1月28日/琉球新報ホール)など。

(註3)『週刊金曜日』(2007年2月9日号)岡本光博(美術家)「論争『沖縄タイムス』に"踏み付けられて"」。これは、岡本氏が昨年の「慰霊の日」(6月23日)に琉球大学で行ったインスタレーションの作品展示に対し、[沖縄タイムスが今年1月23日付け朝刊に掲載した記事](#)への岡本氏の「反論の論考」である。

詳しいことについては、それらを見てほしいが、その報道(記事)とは、本島南部糸満市にある戦没慰霊碑の「平和の礎」を作品化したとして、大きな見出しで『戦没者名 踏んで鑑賞』、「京都在住の美術家制作」に「県「不快」抗議」というものだ。それに対し、岡本氏は「反論」の機会を与えるようタイムスに要望したが、「反論要求から10日以上経過しても、反論や事実誤認の訂正を掲載する旨の連絡はなかった」として、『週刊金曜日』2月9日号で「『沖縄タイムス』に"踏み付けられて"」という論考で一連の経過についての「反論」を行っている。その中では、私のここまでの論考と似た主旨のことも書かれているし、他にも「...タイムスの沖縄初の美術館の指定管理者への参入というシナリオ」という件があり、そのネタ元として、本ブログのことが「紹介」されている。

私自身そうした"うわさ"について吹聴したことはあるし、それ以前から"出回っていた"のも確かである。しかし、本ブログでは、そうしたことを「言明」したことはないし(できるはずもないし)、岡本氏もそのあたりは「...かもしれない」としているのだから、変な「誤解」が連鎖しないようにここで一応断っておきたいと思う。ただ、筆者には、タイムスと岡本氏の「やりとり」の是非はわからないし、どのような事情でそうした「流れ」になったのかも知らないが、もし岡本氏が主張していることが「本当」なら、こうしたマスコミのあり方は、素朴にアンフェアなものに見える。

また、岡本氏の「作品」については、それなりに「評価」もしていたので、正直、タイムスの報道記事には違和感を覚えた。結論から言えば、ろくに作品のコンセプト(趣旨や背景)も理解せずに、一部の事象(「戦

没者名を足で踏んだ写真」 冒瀆的で不快)にだけ過剰反応(クローズアップ)して、作品の意図を十分汲み取ることなしに、最初から作家を「悪者扱い」している印象を受けたというものだ。ここではこれ以上は言及しないが、少なくともタイムスは、いらぬ誤解の払拭や作家の「人権」を尊重するためにも、作家に「反論」の機会 = 「言論の自由」を与えるべきだったと思う。

再度くり返しになるが、このブログの 11 月 30 日付けの、[「教育委員会主催、沖縄タイムス社共催による『美術館開館記念フォーラム part 1 ~文学・思想から考える~』に参加して」](#)にも書いたように、その一週間後の沖縄タイムス(11月25日(土))に掲載されたその「フォーラム part 1」の「特集」内容は、懸念していたようにタイムスに都合のいい展開になっていて失望した。

そのときにも書いたが、当日は参加者もまばらで、基本的に司会 = 聞き手の進行が悪く、パネリストもごちない対応であった。パネリストらの発言内容も(たぶん時間的制約もあって)これまで新聞紙上で展開されてきたような「文化・文芸批評」の「要約」の域をでなかったと思うが、翌日のタイムス朝刊には、この手のフォーラムではほとんど見られない一面フロントページに「文化史に理解深める」との見出しが付いていて、いかにも「充実」した内容のような扱いだっただ(もちろん当日の様子はとてもそんな状況とは言えなかった)。

フォーラムでは、とりあえず「美術」関連のフォーラムなので、司会 = 聞き手が無理に(?)「美術」の話題につなげるようパネリストたちに要請するが、みな「専門家」ではないので(当人たちも謙虚にそう断っていたが)、当然一般化された無難な「見解」しか出てこないし、むしろ答弁に困惑するという場面が多かったように思う。また、フロアーからの"批判的"質疑(筆者のことである)や、もう一人のフロアーからの質問に関しては、特に断りもなく紙面では省かれていた。

実際、その 11 月 25 日(土)のタイムス「特集」記事でも『多角的に独自に創造』と大きな見出しが付いているが、パネリストの「報告の骨子」やパネリスト同士の質疑応答をみても、おおざっぱな(というより中途半端な)まとめ方で、何がどう「多角的に創造」されてきたのかよく分からないものになっている。

また、「特集」というから、同じく 10 月 23 日(金)に掲載された同紙の『秋の美術展・沖展会員新作展』座談会のように、2面にわたって大きく掲載されるものとばかりに(勝手に)想像していたので、その意味でもはぐらかされた思いがした。しかし、その『沖展会員新作展』座談会も、タイムスの自社主催とは言え、相変わらず"懐古的"で"身内賞賛的"側面が強いものであった。

ここで、ちょっと脱線するが、この論考や当の「美術館問題」にも大いに関わると思うので、『沖展』を知らない(県外の!?)人のために少し解説しておこう。『沖展』とは、戦後間もなく、沖縄タイムス社が開催した「総合美術展」のことで、今年で 59 回目を迎える沖縄では「歴史的な権威ある展覧会」である。戦後の荒廃した社会状況に、文化・娯楽イベントとして登場し、学校の教室や体育館などを利用して、絵画や彫刻、写真、デザイン、版画、陶芸、ガラス、漆器、染織、書道などを総花的に展示・展開するというものだ。他県でも『県展』とかという形で、なじみがあるような「光景」かもしれないが、本格的な「美術館」のない沖縄では、今でも「美術展」といえば『沖展』というほど最もポピュラーで権威ある「総合美術展」である。アマチュアの「登竜門的」展示会としても人気が高いが、反面、『沖展』関係者以外の「美術関係者」の一部(!?)からは、(沖縄の)「美術」に対するイメージを固定化するアナクロでアカデミックな展示会として何年も前から批

判されている。

10月12日(火)夕刊「今晚の話題」では、『沖展』にもさまざまな問題が生じているといわれて久しいが...と自社記者(U氏)があたかも「内省」しているようなことを書いているが、その割には、それら「さまざまな問題」がどのくらい自覚されているかは疑わしい。というより、そうした「指摘」自体これまで何度も"指摘"されてきたことなので、ほとんど建て前的(マンネリ)で、具体的な「進歩」が見られないというのが実情である。

むしろ近年の『沖展』は、沖縄の"閉鎖的美術状況"に居直る形で、ポピュリズム的志向(大衆迎合的傾向)をいっそう強くしているように見える。そして、それに反比例するように思想的・批評的傾向はますます貧しくしている。情けないと思うが、私はこうした傾向に、タイムスの「おごり」をみているが、同時に今日のジャーナリズムの「文化」に対する姿勢の一端が如実にでていると思う。新聞社がこうした文化事業に関わるのは悪いことではないだろうが、ここにきて「美術館(博物館)問題」や「指定管理者」の問題ともからんで、自社の"利益"につながることはあからさまに持ち上げ、都合の悪いことには、あからさまなほど"突っ込まない"、そんな印象を強くしている。

こうした批判に対し、新聞社とはいえ民間の企業なのだから当然だという「声」もあるかもしれないが、言うまでもなく、新聞社は同時に最も公共的な影響力ある機関でもあるのだから、そんな都合勝手なことは言えないと思うし、そもそも"不自然"でさえある(見方によっては立派な"情報操作"である)。また、立場上常に「良識的」で「正義」であらねばならないと思っているのかもしれないが、そのことが同社の立場を常に正当化するとは限らない。そんなことは言われなくても分かっているはずだが、メディア批判が厳しい近年の状況を考えれば、もっと自覚した方がいいのではないかと老婆心ながらにも思う。しかし『沖展』のあからさまなほどの自画自賛ぶりや「美術館開館記念フォーラム」に対する批判を欠いた報道をみていると、そういうスタンスは今のところ期待できそうもないようだ。案外、地方のメディアほど自社に対する「内省的」見解は出しにくいかもしれないが、だとしたら、それはやはり「おかしい」し「危険」なことだと思う。

11月25日(土)タイムス朝刊「特集」の話にもどると、大きな見出し『多角的に独自に創造』には、「美術館開館記念展」で沖縄の美術を「多角的視点」から検証したいという企画者側の意図があるのは確かだろうが、正直「美術館開館記念フォーラム」と銘打たれている割には、肝心の「美術」に対する視点があまりにも弱いという印象は否めなかった。揚げ足取りに聞こえるかもしれないが、「多角的視点」=「沖縄の美術館問題は文化問題である」(!?)を強調するあまり「中心的視点」がむしろはぐらかされている感すら覚えた。このことは「part 2」や「part 3」に参加したときにも感じたことだが、「美術展」企画側の「責任主体=中心」の曖昧さも大いに関わっていると思う。沖縄県教育委員会主催とあるが、実質的な主催は、共催側の沖縄タイムスではないかとさえ思ったほどだ。うがった見方をすれば、『沖展』レベルの美術認識で、無理に「現代思想」や「現代美術」的(?)問題意識を展開しようとして混乱しているのではないかとも感じた(たとえば「part 2」の「表象文化」の概念も、あまり理解されていないのではないかと思った。というのも「表象文化」の「学問的」概念では、「part 2」のテーマに限らず、「フォーラム」で扱われている文学や思想、芸術、演劇(?)すべてがその対象になるからであり、むしろ「文化」に対するアプローチのあり方自体を問題にするものだからだ)。

同フォーラム「part 1」で、私が唯一興味をもったのは、沖縄大学助教授(日本近代思想史)屋嘉比収氏の、

山里永吉（作家・美術家）に関する「沖縄で最初に洋風の結婚式をあげたモダニスト」だったというエピソードと、その山里ら大正以降の「近代モダニズム」（モダニストたち）が、その後の沖縄の美術の問題にどうかかわっているのかという「沖縄の美術関係者」への「逆質問」についてである。

山里永吉については、私も知らないところが多いので偉そうなことは言えないが、屋嘉比氏が指摘しているように、大正末期の一時期、東京で「マヴォ」という前衛グループのメンバーの一人として活動したり、画家の村山知義らとも知己であったことは知られている。しかし「前衛美術家」としての山里の、その後の（沖縄での）活動や後代への影響がどのようなものであったかは、ほとんど聞かれない（註4）。そのあたりは1995年の沖縄県主催による『沖縄戦後美術の流れ～シリーズ1・モダニズムの系譜～』展カタログでも少し触れられているが（星雅彦）むしろ私が興味深かったのは、屋嘉比氏が「美術と言葉」の関係について触れた次のような「質問」である。

「もう一つは、大城貞俊先生や大野先生（当日の他の二人のパネリスト）がおっしゃったように、文学や思想は言葉の問題があるが故に逆に屈折し、内面を掘り下げ、それが文学的な活動になり、思想的な基盤になる。しかし美術の場合は言葉を介在せずに、絵の具を使用する。そのような同じ道具を使えるという利点が、逆に沖縄的な美術というものを薄めたんじゃないか。そういう問いが成り立つかどうか、それをぜひ美術家のみなさんに聞いてみたいと思う（屋嘉比）」（沖縄タイムス11月25日「特集」より）

私は、日頃から屋嘉比氏の「知識人」としての人格や発言や、そのスタンスには敬意の念を持っているし、その「質問」は謙虚な気持ちから発せられたと思うので、そうしたことを踏まえたうえで一美術関係者から、多少「批評的」＝揚げ足取り気味（？）に言わせてもらえば、その問は必ずしも成り立たないと思う。

まず、「美術の場合は言葉が介在せずに」という認識がそもそも広く流通している「誤解」だと思う。近代以降（に限らないと思うのだが）美術も「言葉」や「思想」という批評的の制度＝歴史的文脈と併存しているのであり、そのことは本質的な意味で、沖縄の「美術」も「文学」ほどではないにしても、例外ではないはずだからだ。とりわけ、美術館に『泉』と題した既成の「男性用便器」を展示して（1917年/ニューヨーク）美術や美術館の制度的構造的性を暴いたマルセル・デュシャンの有名な"事件"以後の「現代美術」の流れでは、「言葉＝批評性」を介在させた「内省的制度批判」は「芸術」の重要な創造的要諦の一つであり、その影響は「沖縄の美術」状況にも少なからず及んでもいる。例えば、「現代美術」に多少とも知識のある人なら知っているだろうが、1960年代以降に出現した「コンセプチュアルアート（概念芸術）」は、「言葉」と「美術」の関係を、自覚的＝批評的に表現手段としている典型的な「例」である。

そうした視点から言えば、「沖縄的な美術」というのが思想的に「薄い」印象しかないとしたら、それは屋嘉比氏の指摘とも重なるが、「沖縄的な美術」においては、むしろ、そうした「言葉」や批評性との葛藤が乏しかったからだと言うのが私なりの"答え"である。つまり、そうした批評性（言葉や「他者」の介在＝屈折）が「薄かった」がゆえに、逆に「思想的基盤」が弱いだけなのだ。

先にも述べたように、戦後復興期に始まった『沖展』の文化的役割には、確かに大きなものがあったと思う。また、現在もそれなりにあると思う。しかし『沖展』が積極的な「芸術的」意義をもっていたのは、せいぜい情報が少なかった1970年代初め頃までである。70年代以降に出てきた沖縄の「作家」たちにとっては、むしろ「批判的」対象として捉えられる傾向が大きかった。そして、こうした「批評の問題」は、沖縄の美術界でも80年代までは、けっこう意識（だけは）されていたと思うが、90年代以降、「ポップ」や「大衆」礼

讚状況がとりざたされるようになると、先に指摘した『沖展』のポピュリズム的傾向とも関わり、「批評不在の指摘」までますます「薄く」貧困になってしまった。

昨年の「沖展評」はとうとう自社学芸部の担当記者による「評＝解説？」になっている。これでは、先の『沖展新作展』座談会が身内の沖展会員による"自画自賛"的状况に陥るのと同様、批評的視点はますます「薄く」なっていくだけである。

そもそも沖縄では、「近代美術」さえ実質的には戦後始まったとされるのが美術関係者の中でも一般的な認識となっている。そしてその歴史の浅い「沖縄の近代美術」の中身(質)がどの程度のもだったかと言えば、進行している「県立美術館」の中身同様、これまた地元新聞等で"自画自賛"的に評価されているほど「立派」なものとも言えない。

70年代から80年代にかけて県内の「美術批評」を積極的に「実践」していた、当時琉球大学ドイツ語講師の仲井間憲児氏は、『沖縄の芸術4 絵画・書道』(沖縄タイムス社、1989年)の中で「.....振り返って、近代を生きた絵描きたちをみると、その人たちの思考がそれなりにすぐれた成果をあげたことは確かだが、追隨に急なあまり、素材・方法・様式・思想、すべてを含めて芸術の背後にある必然性とは何かを置き忘れてきたように思えてならない。沖縄は、芸術における近代を成熟させることなしに現代を迎えたと思う」と結んでいる。

仲井間氏の当時の「美術批評」自体、今から「振り返って」みると"成熟"とまでは言えない感もあるが、そのことはそれなりに自覚されていたろうし、沖縄の「美術批評」のなかでは、まだまともなほうだと思う(私も偉そうなことは言えないが)。しかし、近年は「オリエンタリズム」的近代批判を背景にしたような、何度目かの「沖縄ブーム」を配慮してか、「沖縄の美術」も一気に「近代」という"自己卑下のもと"を乗り越えるべく「新しい価値の言説＝ストーリー」をこしらえようとする風潮が顕著になってきている(気がする)。先に指摘した「進貢船」＝「大航海時代」を、建設中の「県立博物館・美術館」の"目玉"にしようというあからさまなイベント化もそうした傾向の現れだと思うが、そのような状況は、(一般受けはするかもしれないが)正直、こっけいな気がするし、仲井間氏同様「何かを置き忘れている(忘れたがっている)」としか思えない。

屋嘉比氏の「質問」にもどってさらに言えば、「絵の具(を使える)」というのも20世紀に入ってからは、必ずしも絵画や平面作品の「前提＝メディウム」ではないし、「立体作品」に関しても、工芸作品や従来的な意味での石膏やそれを鋳造した彫刻が主流とは言えない。にも関わらず沖縄では、「美術」や「芸術」といえば相変わらず『沖展』というのが「主流＝趨勢」になっているように、「美術」のイメージ自体が、屋嘉比氏が指摘するようなレベルで流通しているため、なかなか「思想的」課題になれないのである。

例えば、これは画家のウエチヒロ氏(『沖展』会員)がやっていることだが、絵の具の代わりに沖縄の各地で採取した土だけ(!?)を使って描いた作品群が「沖縄的」なものを出表するかと言えば、そんなことはないと思うし、むしろ、そうした発想で「沖縄的」なものを標榜(?)しているのだとしたら、私には素朴、短絡的で、「屈折」も「思想」も自覚されてないように思う。

また、そのウエチヒロ氏が昨年の『沖展』において、タイムス紙上である別の作家の作品を解説しながら、作品を疲れずにみる「方法」として、「そこに何が描かれているかを考えずに見る。つまり頭で見るのではなく、色のハーモニーや線のリズム、形の面白さなどを視覚的に楽しむこと(傍点筆者)」と述べている(沖縄タイムス2006年3月20日)が、こうした言い回しは、例えば「言葉を超えた(?)芸術体験」や「自由にものを見ることの重要性」をうんちくするとき、むしろ手っ取り早く使われる「安易な理屈」だと思ってい

る。もちろん、実際は何も「考えずに」「自由にもの＝作品を見る」ことほど難しいことはないし、どのような作品もそれなりの文脈＝理屈というものがあ程度学習（前提）されていなければ、とっかかりさえつかめない。しかし、そうした言説が「屈折」もなく流通すること自体、やはり「思想的」貧困さを示しているとしか思えない（『沖展』を見て回って「疲れる」のは、単純に作品が多すぎるのと人が多すぎるからだろう）。

現在「美術館問題」で"問題"の一つになっている「現代美術」の「現代」がはらむ"内省的制度批判"という「思想的」問題意識も、当然ながらひどく希薄なままである。私は『沖展』の存在と「沖縄県立現代美術館（仮称）」から「現代」が削除されたことは案外関係があると思っているが、自戒を込めて言えば、「沖縄の美術」は実際に問題意識でも質的レベルでも今だ「貧しい」状況に止まっているのである。

（註4）山里永吉の「絵画観」について、『琉球の文化』第4号（1973年）で大城精徳氏が山里の言葉を引用して次のように紹介している。「……私（山里）が近ごろだれにもわかる今の若いものから見ると古くさいと思われる油絵を、飽きもせず描いているのは、ダダの虚無（ニヒリズム）をくぐりぬけてきた結果、芸術に新旧の差別をつけること自体がナンセンスであり、アブストラクト（抽象）などひとつの流行にすぎず、つまり芸術に絶対があるはずはなく、表現手段の新旧など一世紀も経れば区別がつかなくなると信じているからである。そして、当然それは私が若いころ、村山知義を中心とするマヴォの同人となり、さらに二科の会員になって、オブジェであろうが、コラージュであろうが、またはアブストラクトという、近ごろになってまるで美術の先端のように錯覚されている作品を、半世紀も前にすでにさんざん手がけてきたための、意識的反動であるにちがいない。」山里の「前衛的」な作品が、どの「程度」のものであったのか具体的に知らないのもこれあまり言及できないが、山里の"達観"したような言説は、やはり時代の文脈に沿って疑ってみる必要があると思う。

「フォーラム part 2」は、先にも少し述べたように、個々のパネリストの発表はそれなりに興味深いものであったが、反面、全体としてはまとまりに欠けた印象が強かった。[（参考記事）](#)

當山忠氏の＜アイドルと時代＞は、戦後の「沖縄系アイドル」の変遷に沖縄の政治・思想的変遷の過程との符合を見て、そこに表象＝芸能の側面から文化と共同体の関係を検証するものだ（沖縄タイムス 2006年12月12日朝刊参照）。ただ、現在のアイドルの元祖に地域共同体の「神人（カミンチュ）」の存在を当てはめ、そこに近代以前の地域共同体的社会から今日の資本（消費）主義的国家社会への断続的・従属的過程を重ねて、その克服のために新たな"神性"をもった"アイドル"（具体的には Cocco とか）の出現に救いを求めるようなプレモダン的→ポストモダン的展開は、筆者にはついていけなかった。思想的にも飛躍し過ぎた感があり説得力に欠けたと思う。

新垣誠氏の＜移民＞は、おおざっぱにまとめれば、移民の国境を超えるという移動性に、国家＝国文化の根本的な均一化・排他的性格を乗り越える、柔軟で多様な文化の発生の可能性をみるというものだ（沖縄タイムス 2006年12月13日朝刊参照）。「世界のウチナーンチュ大会」を一つの象徴的モデルとしてとりあげながら、「沖縄移民」の今日に至る歴史過程に「国粹へ向かう「国家」のベクトルと、国家の枠を超える「超国家」のベクトル」への「危うい」両義的可能性を指摘していた。ここでもラテンポップスグループ「ディアマンテス」

のリーダー、アルベルト城間（移民3世）が好意的に持ち出されるが、新垣氏自身も言っていたように、彼等のスタンスも微妙なところだと思った。また、當山氏の「アイドル論」と消費的「観光沖縄イメージ」の起点に位置付けられる「海洋博」との対比性で、同じく Cocco やキロロ、オレンジレンジ等のインディーズバンドの隆盛に、気負いなく「沖縄」を表現する世代の可能性(!?)をみている。

仲里効氏は、「復帰記念三大事業（「植樹祭」、「若夏国体」、「海洋博」）」に「祝賀」や「記念」を強調することで、当時の日本への「復帰不安」と、沖縄民衆の根深い反天皇制と反自衛隊（日本軍）感情を鎮めるための国家規模の「政治的戦略」を指摘していた（沖縄タイムス 2006 年 12 月 15 日朝刊）。とりわけ「海洋博」の背景に、「開発」という名のもとに今日まで続く「観光・リゾート」に特化した経済的・消費的「沖縄イメージ（想像の沖縄）」の誕生を、そしてそのかたわら（東海岸側）では金武湾の埋め立てと CTS 石油基地建設による「海と共同体の破壊」という非対照的な風景の変容をみながら、その変容過程で沖縄の人々の意識のみならず「身体性」までもが「改造」されていく過程を批判的に重ねてみせた。

個々の問題意識は刺激的で興味深いものだったが、ここでもそれら「表象文化論」が「美術」や「芸術」とどうかかわるのかの接点が希薄で、「フォーラム」自体の方向性が見えにくいものとなった（フロアから「沖縄方言」で「壇上の先生方、いったい誰に向かって何の話をしているのか」と苛立ちを露にするような意見＝批判も出たほどだ）。

また、先にも指摘したように司会＝聞き手の要領（進行）が基本的にマズイので、そうした印象に拍車をかけるように錯綜とした装いを与えてしまった。「part 1」とはうってかわって、フロアからの意見も広く聞き入れたが、「美術館」自体がはらむ「権力的性格」についての「指摘＝質問」に対しては、仲里氏が「前提としてそれは踏まえていると思っている」としながらも、私自身は『沖展』的な認識＝タイムスの実質的な主導體制(!?)では、どこまでそうした問題意識が共有されているのか疑問に思った。

「フォーラム part 3」は、「沖縄の造形」ということで、「美術館開館記念展」のフォーラムとしては最も主旨にかなったテーマだったと思うが（[参考記事](#)）、「part 2」でのパネリストたちの「思想的展開」（表象文化論）が逆に「浮いてしまった」のとは反対に、「思想的側面」があまりにも頼りなく相変わらず要領の悪い進行とともに、煮え切らない後味の悪さを残すものとなった。

まず、＜写真・映像＞という視点からパネリストの一人、仲本賢氏（県立芸大助教授）の発表があった。1853 年にアメリカのペリー一行（黒船）が沖縄に立ち寄った際、初めて従軍写真家による「写真」が沖縄に「登場」したとされる「歴史的事件」を端緒に、「撮る側と撮られる側」との権力関係をほのめかしながら、暗に沖縄の歴史的「被植民地的状況」と写真の構造的(?)問題を重ねていたように思う。しかし、近年の「ちゅらさん」などの「沖縄ブーム」を安易に好意的に肯定しながら、そこに「撮られる側から撮る側へ」と「情報の発信者として発言権を得たことを幸運に思い、楽しまなければならない」と、けっこう楽観的に価値観＝権力構造の転覆を重ねているような言説には違和感を覚えた（沖縄タイムス 2007 年 1 月 22 日朝刊参照）。

安易だと思われるのは、例えば「ちゅらさん」が放映されることになった背景に、「沖縄の基地」を撮らないことが条件だったらしいこと（実際に「ちゅらさん」には、基地などの、現在も続く沖縄の「被植民地的状況」を示す映像はいっさい出てこない）に象徴されるように、仲本氏が言う「情報の発信者」という主体化が、相変わらず他者の「まなざし」に迎合（こびる）するような傾向が大きいかもしれないことに無頓着な点だ。また、本人も一応踏まえているようではあったが、「撮る－撮られる」関係が、必ずしも「権力－被権力」という構図をとるとは限らないし、文脈＝状況によってその関係性が変化していくことへの分析がおおざっぱで

"慎重さ"に欠けていたと思う。

二人目のパネリスト、西村貞雄氏（琉球大学美術工芸科教授）は〈絵画・造形〉のテーマで発表した。琉球王国時代から戦後の美術の動向までを無難ながらも体系的に整理してまとめていた（沖縄タイムス 2007 年 1 月 26 日朝刊参照）。ただ、「フォーラム」での発表がほとんど「近代以前」の琉球王府時代に比重が置かれており、「近代以降」についてはわずかに触れるだけで、期待をはぐらかされた思いを強くした。そもそも「近代以前」の美術工芸については、博物館のセクション（管轄部門）に位置付けられているので、「美術館開館記念フォーラム」の主旨を踏まえるのなら「近代以降」に比重を置いて議論を促すのが筋ではないかと思ったが、残念ながらその後の討論でも「近代以降」の状況についてはほとんど触れられなかった。

三人目のパネリスト、親泊仲真氏（建築家）は〈建築・都市・環境〉の視点から発表した。戦後の沖縄（の島々）の住宅に、米国産の 2 インチ×4 インチのツーバイフォー角材をベースにしたプロトタイプの規格住宅の広がりや、その後の「花ブロック」を多様したコンクリート建築の広がりやに沖縄独特の生活感に根ざしたりリズムの共有を見る視点は導入としてはおもしろかったが（沖縄タイムス 2007 年 2 月 1 日朝刊参照）、内部化され共有されたとされる「風景」が、「ドミナンス（優性？）に包まれる」という意味がよくわからなかった。

また、これらの「風景」が自分達（沖縄民衆）の無意識が「作り出していった」という論調もちょっと「おかしい」と思った。というのも、戦後の復興時において、そうした規格住宅は物資の少ない状況から必要に迫られて生まれたもので、コンクリートブロック建材による住宅の普及も、米軍から「与えられた」形式であるはずだからだ。つまり、今から振り返ってみると「時代の原風景」としてみえるだけで、そうした意味では「民衆の無意識が造った」のではなく、与えられた（ある意味では「押し付けられた」）形式としての規格住宅が、逆に無意識の領域に「原風景」として植え付けられたとみるのが自然ではないか。

それゆえ、筆者自身ひき継いで「意見」を述べたが、フローアからの質問で、現在観光化の一環として進められている（例えば那覇市首里地区の）「赤瓦奨励」の動きも、時代を経れば新たな「原風景」として「押し付けられた」ものとしてみることも可能ではないかというような質問に、規格住宅やコンクリート建築は自分達の無意識が作り出したもので、上から押し付けられたような「赤瓦奨励」運動（？）とは別のものという主張はやはり「おかしい」と思った。

むしろ、親泊氏の論調には、占領されたがゆえに起こった住環境の変化が、60 年を経て沖縄民衆にとってノスタルジックなドミナンスな「原風景」としてとらえられていることを積極的に評価をしようとする印象が強く（そうした「感性」はわからないではないが）それが、ややもすると「占領されて良いこともあった」というような近視眼的な「豊かさ」として価値付けられ、「基地」を押し付けられているという根本的でより深刻な差別的植民地的状況を後景化する作用すらおこしかねない危惧を覚えた。

最後に学芸員の前田比呂也氏が発言したが、筆者は、今「フォーラム」では、唯一"問題"になっている「美術館問題」の核心に迫る問題提起をしたものとして受け取った。おおざっぱにまとめれば、自らがこれも沖縄タイムス 1999 年 3 月 29 日文化欄に掲載した『福岡アジア美術館に学ぶ』の論考から、「このアジア美術館の変遷を後小路雅弘氏（福岡アジア美術館学芸課長）は「フェスティバルから展覧会へ」と形容しているが、それは学芸員が展覧会の主体性を取り戻していく過程でもあり、また美術館建設の在り方そのものにもかかわる大切な考え方である」という部分を引用しつつ、沖縄の進行中の「美術館」の現状は、「開館記念展フォーラム」も含めて、「フェスティバルから展覧会へ」ではなく、むしろ「フェスティバルからイベント」へ

の方向へ向かっているようで、そのことに強い危機感をもっているというものだった。たぶん現場で働いている者（学芸員）としての正直な感想だろう。

ところが、この「フォーラム part 3」を「特集」した沖縄タイムス（2007年2月18日朝刊）の前田氏の「報告骨子」では、みごとにその「フェスティバルからイベントへ向かっているようで」という発言部分だけが排除され、「美術館の活動、特に開館記念展は学芸員が調査研究に基づき成果を社会に問う「フェスティバルから展覧会へ」という形が重要。だから私は現状に強い危機感を持っている」と書かれており、何に対して危機感をもっているかが、新聞記事をみただけでは分からないようになっている（紙面のレイアウトをみるとそれだけの文言を入れるだけの余裕はあるように見えるが）。

筆者からすれば、このことは文体としても"不自然"に見えるが、うがった見方をすれば先に紹介した、「フォーラム」で司会＝聞き手を担当している真久田正氏が、歴史学者で「博物館側」の監修者の一人である高良倉吉氏を発起人の一人とする「仲間たち」と進めているらしい、「博物館・美術館の目玉＝観光イベント化」のための『進貢船を復元する会』設立の動きと関係があるのではないかと考えている。つまりタイムスは意図的にこの前田氏の、現状は「フェスティバルからイベントへ向かっている」という発言部分だけを排除し、発言の意図自体を「ぼかして」しまったのではないかと疑っている。だとしたら本当に情けないことだし「おかしな」ことだと思う。

現在「part 4」に向けた論考がタイムス紙上で展開されているが、この調子ではそれもどのような展開になるのか、正直危惧しているところである。先にも述べたように「part 3」では、とうとう別の美術関係者からも司会＝聞き手を含めたパネリストたちの「人選」の根拠を問うような批判的意見も出てきたが、私自身、司会＝聞き手は代えたほうがいいと思っている。むしろ、学芸員こそが「開館記念展」の企画の中心にいて「全体」を見渡せる立場にあるはずだから、企画担当の学芸員が、パネリストではなく進行を努め、脱線しがちなさまざまな意見を取りまとめていくほうがいいのではないかと思う。「責任主体＝中心」が曖昧だといったのは、そうしたことも含めてのことであり、今のままではどのような「開館記念展」になるのかまったくイメージがつかめないのである。